

少人数演習形式の授業で新しい社会を構想する思考を鍛える

社会科学教育講座・松野尾 裕

1. 授業の概要

①授業題目：人間の経済(human economy)

②授業のキーワード：生計(livelihood)、生活の質(quality of life)、ディーセント・ワーク(decent work)、相互扶助(mutual aid)

③授業の目的：現代社会の経済を人間生活にふさわしい本来の人間の経済へ回復させるという問題意識を基礎に置き、20世紀日本の暮らしの変容を振り返り、21世紀の経済社会が直面する諸課題と未来への展望を多角的に捉えることができるようになる。

④授業の到達目標：(1)新聞や評論雑誌等の経済記事や生活関連記事で使用される用語を理解することができる。(2)経済社会や生活問題に関する基礎的な文章を作成することができる。(3)経済学、生活学、社会政策その他の社会科学関係の教養書に興味を持つことができる。

⑤ディプロマ・ポリシーに関わる事項：(1)共生社会を築くため、地域・福祉・平和に関する幅広い知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している(知識・理解)。(2)地域・福祉・平和をめぐる現代社会における諸問題に関心を持ち、これらの問題に取り組むための理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる(関心・意欲)。

⑥授業内容：20世紀は「経済の世紀」と呼ばれる。この「経済の世紀」は、国家を単位にして経済をいかに成長させるかに国民の関心が集中した。要するに20世紀は、国家が自国の生産力(GDP)をどれだけ高められるかでしのぎを削った世紀であった。では、その結果、人間の生活は本当に豊かになったのか。先進国も途上国も、経済効率至上主義で構築された社会システムのなかで、「人間としての尊厳が保障される生活と働き方」は見失われ、家族や地域に本来あるはずの人間同士の支えあいを失う結果になってしまったのではないか。本授業では、20世紀の人々の暮らしの変容を学び、これまでの経済学が積極的に理論化してこなかった家事労働やボ

ランティア活動、非営利企業など非市場領域における経済活動をも視野に入れ、すべての人間にとって尊厳ある生き方・働き方を可能にする経済社会を構築するための理論を探究する。

⑦授業スケジュール：

第1回 イントロダクション

第2～4回 新しい経済社会の構想(1)

使用文献：大沢真理「いま、なぜ、「生活の協同」なのか―排除を超えてともに生きる社会へ」

第5～7回 新しい経済社会の構想(2)

使用文献：御船美智子「生活創造のフロンティア―生活協同組合の可能性」

第8～10回 新しい経済社会の構想(3)

使用文献：上村協子「生活創造時代の消費者教育―消費生活創造論 試論」

第11回 振り返り

第12～14回 課題探究と発表

第15回 まとめ

⑧授業時間外学習：授業中に配布あるいは指示する文献等を利用して復習及び予習をおこなう。

⑨成績評価方法：評価の方法は、授業における発言と討論の内容および期末に提出するレポートに基づく。評価の基準は、まず授業の内容を理解しているか(50点)、次いでその理解した内容を各自の考察へと発展させているか(50点)、である(計100点)。

⑩受講条件：「希望の経済学」を履修していることが望ましい。

⑪受講のルール：授業は、講義ではなく、受講者による文献講読と討論を軸にして進められるので、受講者には授業づくりへの積極的な姿勢が求められる。

⑫受講者数：6人

人間社会デザインコース 3 回生 5 人 (うち留学生 1 人)、法文学部総合政策学科 4 回生 1 人 (うち留学生 1 人)。

2. 授業評価アンケート

①実施日 2014年1月16日

②対象者：5人（男性4人、女性1人）

③回答者：5人

④質問：この授業は次の教育学部DP1～4にいかに関与したと思いますか。

DP1（得意分野の専門的知識を修得している：知識・理解）

DP2（現代的課題への適切な対応策のあり方について考え、判断することができる：思考・判断）

DP3（高い技能と豊かな表現力を身につけている：技能・表現）

DP4（理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる：関心・意欲）

DP5（多世代にわたる対人関係力を身につけている：態度）

⑤評価の方法：「(IV) 十分貢献した」、「(III) 貢献した」、「(II) あまり貢献しなかった」、「(I) 授業の目標・内容がDPとは無関係であった」の4段階評価

⑥アンケート結果：

	IV	III	II	I
DP1	3	2	0	0
DP2	3	2	0	0
DP3	4	1	0	0
DP4	4	1	0	0
DP5	3	2	0	0

3. 総括

①少人数授業：本授業は文献講読と討論を軸にして進めた。このことについては事前に作成してあるシラバスに明記しているが、各受講者の発表や発言の頻度がどのくらいになるかは、実際に受講者の人数が確定し、加えて各受講者の本授業への関心の度合いがどの程度であるかによって大きく異なる。今年度の授業では受講者が6人と少数であったため、授業時間内および前後の雑談の時間を含めて各受講者とかなり密な会話を継続できたことは良かった。また受講者のうち留学生が2人含まれていたことも、文献講読・討論の内容を明快なものにするうえで有効に働いた。このことはDP1～5のすべてについて比較的良い評価が与えられたことに反映されていると思わ

れる。

②総合的な思考：本授業は3回生後期に受講する科目である。したがって本授業に関連する科目として法学、政治学、経済学、社会学、倫理学等の領域の基礎的科目をすでに履修したうえで本授業を受講することを前提にして授業の内容およびレベルを設定している。授業内で使用した文献を読み込み、深く考えるためには、「人権」「公共」「福祉」といった概念が含む豊かな内容を把握していることが必要である。そのことを受講者各自が十分に理解するよう求めた。DP2に関する評価を見る限りでは、他の授業で身に付けた知識等も動員して総合的に思考・判断する力については「十分」には至っていないようだ。

③主体的な学習：DP3とDP4に関して高い評価が与えられているのは、本授業の方法からして当然であろう。「豊かな表現力」は授業中の発言だけでなく、むしろ日常の友人や家族との会話等のなかで受講者各自が感じ取ることを期待したい。「理論と実践を結びつけた主体的な学習」は今後の就職活動等でどういう進路を選択するかといったところで具体的に直面するのであろう。

④まとめ：期末レポートには受講者の思いがつつられている。「人並みに快適な生活が成り立ち、社会に参加するうえでのリスクは、本来、多様な形態と程度をとり、政府や組織の側から簡略に規定できるものではない」（Uさん）。「人と関わることができるという自信や豊かな経験が、それぞれの社会的な安心を生み出すこともできる」（Sさん）。「持続可能性は、われらの共有の未来を現在、意識することで、高まっていく」（Aさん）。

DP5の「多世代にわたる対人関係力を身につけている」ということは並大抵のことではあるまい。正々堂々と言う人々が現代の日本にどれだけいるのか。学生たちにDP5を示して授業を評価させることの重さを大学はどれだけ自覚しているのだろうか。教員は組織のためにこの授業評価をしているのだが、学生は生身の人間なのである。